

宗岡二中だより

3月号

令和6年3月1日



自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

学びたいのです

校長 伊藤大輔

春は別れの季節です。そして新しい出会いの季節です。お世話になった人を思い出す季節です。私は悩むことがあると恩師と過ごした時間を思い出します。特に大学時代後半の三年間担当して下さった先生は「学ぶこと」に対して、自他共に厳しい姿勢を貫かれていました。先生の授業は、最新の論文について発表者の提案を基に議論するスタイルで進みました。発表担当者の準備不足や参会者の生半可な態度を見抜き、ズバズバと指導されました。体調を崩したり、途中で辞める学生もいました。私は劣等生だったので「論文の読みが浅い！発表の中身が伝わらん！質問がつまらん！」と、ほぼ毎回突っ込まれました。悔しさと不甲斐(ふがい)なさで落ち込みました。しかし不思議とやめたい、離れたいとは思いませんでした。「この先生に自分を認めさせてやる」と本気で思っていたからです。今振り返ると、恐れ多いことです。劣等生だけに、危なっかしいと思われたのか、四年時にはゼミのリーダー役を命じられました。私への要求はさらに厳しくなりました。教員になるための試験に関する作文指導や面接指導にも沢山時間を費やしてくれました。卒業時、あいさつに行くと満面の笑顔で握手してくださいました。涙が出ました。先生のそばで過ごした時間は、ここぞという局面で今でも私の背中を押してくれます。

学校は学びの機会に溢(あふ)れています。そして学ぶ力とは、あらゆる機会を「学びに転換する力」だと私は思います。武道家で哲学者の内田 樹(うちだ たつる)氏は、『学ぶ力』と題して、過去に中学2年生の国語教科書に書き下ろしてしま

た。その中に学びに必要な条件として「『学び足りなさ』の自覚があること」「教えてくれる『師(先生)』を自ら見つけようとする」「教えてくれる人を『その気』にさせること。」の三点が挙げられています。そして、以下のようにまとめています。抜粋します。

この三つの条件をひとことで言い表すと、「わたしは学びたいのです。先生、どうか教えてください」というセンテンスになります。数値で表せる成績や点数などの問題ではなく、たったこれだけの言葉。これがわたしの考える「学力」です。このセンテンスを素直に、はっきりと口に出せる人は、もうその段階で「学力のある人」です。

逆に、どれほど知識があろうと、技術があろうと、このひとことを口にできない人は「学力がない人」です。それは英語ができないとか、数式を知らないとか、そういうことではありません。「学びたいのです。先生、教えてください。」という簡単な言葉を口にしようとしな。その言葉を口にすると、とても「損をした」ような気分になるので、できることなら、一生そんな台詞は言わずに済ませたい。だれかにものを頼むなんて「借り」ができるみたいで嫌だ。そういうふうに思う自分を「プライドが高い」とか「気骨がある」と思っている。それが「学力低下」という事態の本質だろうとわたしは思っています。

(中学国語2 『伝え合う言葉』 教育出版 「学ぶ力」 内田樹 より)

三年生の皆さんは、ここまで生きた時間を通じて学び続ける土台を築いたはずです。学ぶ力を高める営みに終わりはありません。「学びたい。」その思いを道連れに豊かな人生を歩んでください。